

## 災害後方支援としての展示の試み

A Trial Attempt at Disaster-Time Logistical Support in the Form of an Exhibition  
MAEKAWA Saori

前川さおり

### はじめに

遠野市立博物館が、2011年4月から2013年1月にかけて開催した一連の展覧会は、東日本大震災の文化財レスキューをテーマにした最も早い事例とされている<sup>(1)</sup>。これら一連の展示内容を紹介しながら、災害展示の課題と「後方支援」としての展示活動という新たな視点について論じる。

大規模災害時における「後方支援」という考え方は、東日本大震災において岩手県遠野市の市民や行政が、外来の「支援者」と「被災者」の間に立ち、両者に向かって活動拠点や救援物資、輸送力、情報、メンタル的支援などを提供してバックアップしたことから広く知られるようになった。

本稿での展示は、被災地域の人々に対して、自らの文化の所在を確認し、生活復旧への足がかりにしてもらうと同時に、文化財レスキューに従事する被災地博物館関係者とその支援者たちをエンカレッジすることを目的とする。

### 1. 最初の東日本大震災支援テーマ展「山奈宗真と明治三陸地震津波」

#### 1-1 開催の経緯と目的

岩手県遠野市は北上高地の中央に位置し、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震の津波によって大きな被害を受けた岩手県三陸沿岸の大槌町・釜石市・大船渡市・陸前高田市・山田町・宮古市とは車で約1時間から1時間半の距離にある。

遠野市は、これらの三陸沿岸と歴史的・文化的な深いつながりがある。このことは、柳田國男の『遠野物語』からも伺われる。この本には遠野の青年・佐々木喜善が、柳田國男に語った119話の伝承が収められているが、実はその約25%は遠野以外の三陸沿岸地方の物語である。三陸沿岸の西洋人の往来、海上の蟹気楼の噂話、遠野から三陸に婿に行った者が明治三陸地震津波で妻子を失い、妻のまぼろしと出会う話など具体的な地名を伴って記されている。その背景には、遠野が内陸に通じる3つの街道と三陸沿岸に通じる4つの街道の結節点であり、古くから馬による陸上交易の中継地として栄えた歴史がある。市のある日には三陸から塩や魚が運ばれ、遠野で米や野菜、工芸品と交換されるというように、遠野と三陸沿岸は、足りないモノを補完しあう関係にあった。その様子が『遠野物語』第2話には「七つの溪谷各七十里の奥より売買の貨物を聚め、其市の日は馬千匹、人千人の賑わしさなりき」と記されている。陸上交易を中心に、遠野に人とモノが行き交うこ

とによって、様々な情報がもたらされ、それが周辺の農村部に拡散し、囲炉裏端を囲んで人から人への「語り」として蓄積していった。それが『遠野物語』に代表される遠野の「語り」の文化の基層となり、三陸沿岸へのシンパシーを育んでいったと思われる。

遠野市立博物館は、1980年に開館した民俗専門の小さな地域博物館である。2010年に『遠野物語』と遠野の民俗をテーマに大規模なリニューアルをしたばかりで、2011年の東日本大震災の被害は比較的軽かったものの、筆者を含め博物館職員全員が発災直後から避難所運営や炊き出し、沿岸への救援物資輸送や内陸からの救援物資受け入れ作業などの災害対応に従事したため、約1ヶ月間休館した。

4月22日に博物館を再開することが決まり、筆者は博物館として何かできないかと考え、災害対応の合間をぬって小さなテーマ展の準備を進めた。

タイトルは「東日本大震災支援テーマ展 明治三陸地震津波と山奈宗真～遠野からのメッセージ～」とし、会期は4月22日から7月11日まで、会場は特別展示室の半分だけを使った(写真1)。

山奈宗真(1847～1909)は、明治時代の遠野の殖産興業指導の先駆者で、明治29年(1896)の明治三陸地震津波で自ら津波被害調査員を志願し、総延長約700kmの長く複雑な三陸の海岸線を1人歩いて踏査した。

当時の遠野の人々がどのような活動をしたのかを振り返り、明治三陸地震津波をしのぐ大災害に見舞われた筆者を含めた遠野市民が、今何をなすべきかを考えるきっかけとなれば、と考えて企画したものである。



写真1 テーマ展の様子

## 1-2 展示構成

展示は3つのコーナーで構成した。第1部は明治三陸地震津波の被害と当時の遠野の様子を写真パネルや解説パネルで紹介。第2部は山奈宗真の生涯を年表や解説、写真で紹介し、第3部の山奈宗真の津波被害調査では、遠野市立図書館所蔵の山奈宗真資料から明治三陸地震津波に関する22点を展示した。

### (1) 明治三陸地震津波と遠野

明治29年(1896)6月15日、岩手県釜石市の東方沖200kmを震源とした地震が起こり、巨大津波が発生して約2万2千人の犠牲者を出した。いわゆる明治三陸地震津波である。当時の遠野には電話はなく、津波の翌朝に釜石、大槌方面から避難民が遠野に来て、その被害が次第に明らかになった。遠野町は町議会を招集して救援を決議し、郡役所に救援本部が置かれ、あらゆる牛馬、車輛、人員を総動員して食糧、生活物資を輸送した。また遠野には救援のため多くの役人、新聞報道関係者、医師・看護婦、陸軍中野電信隊、物資販売の商人などが集まった。<sup>(2)</sup>

2011年の東日本大震災発災直後の遠野市は、明治三陸地震津波の時とまったく同じ事態になってお

り、この救援の歴史を踏まえ、東日本大震災における救援の指針となれbと考えて紹介した。

## (2) 山奈宗真の業績

山奈宗真(1847～1909, 写真2)は、遠野南部家の家臣の子として遠野の城下に生まれた。父親より「産業に従事せよ」との教えを受け、剣道・砲術・和算・地理・測量などの実学を学んだ。

若い頃は江戸や横浜に遊学し、成人後は遠野周辺各地に牧場を開き、アメリカから乳牛を輸入・改良するなど遠野の近代畜産の基礎を作った。

また養蚕を奨励して遠野製糸場を設立し、私設農業試験所でトマト・セロリなどの洋種野菜の栽培も行っている。

彼のような在野の殖産興業の指導者は、明治時代の日本には珍しくはなかったであろうが、彼の特筆すべき業績は、明治三陸地震津波の被害記録を残したことである。<sup>(3)</sup>



写真2 晩年の山奈宗真

## (3) 山奈宗真の津波被害調査

明治三陸地震津波が起きた時、山奈宗真は49歳で決して若くはなかった。彼は岩手県庁に津波被害調査員を志願し、明治29年(1896)7月27日調査員に採用される。9月8日まで陸前高田市から九戸郡洋野町種市まで調査し、調査内容を地域別にまとめた「岩手県沿岸大海嘯取調書」、浸水域を記した「岩手県三陸沿岸部落見取絵図」などの記録を残した。

山奈宗真の記録は、当時は一民間人が行ったものとしてあまり評価されなかったようで、山奈は明治36年(1903)に帝室図書館(現在の国立国会図書館)に寄贈した。しかし、このことが後世に記録を伝えることになり、1980年代になって死亡者数や測量絵図などの正確さから明治三陸地震津波直後をくわしく記録した第一級のデータとして再評価された。

また、記録の中に、住居は、海岸近くの作業小屋と離して高台に作り、生活と仕事場を分けること、防潮林の有効性を評価し、堤防と併用すること、お互いに助け合う相互扶助の習慣を失わないことなどの、津波の予防対策・応急(復旧)対策・長期(復興)対策と考えられるものが記されており、彼の調査の主眼がデータを残すだけにとどまらず、三陸の復興を視野に入れたものであったことがわかる。<sup>(4)</sup>

### 1-3 山奈宗真からのメッセージ

展示では、山奈宗真の調査時の心情や当時の様子をリアルに感じてもらうため、「海嘯被害地巡回日誌」を現代語訳してパネルで紹介した。日誌の最初のページには山奈の意気込みが記されている。

#### ●7月25日 くもり

津波被害地調査の必要を岩手県に建議し、採用になるよう文書を書いて送った。(もし仮に採用されない時には、自分ひとりでも見て歩くつもりであるが、民間人では被害対応に忙しい町役場で相手にしてもらえないだろうから岩手県に相談した)

この部分からは、津波被害調査にかかる情熱と民間人のフットワークの軽さ、その一方で行政の「看板」を持つメリットを知った上で行動する冷静なバランス感覚を見てとることができる。

## 2. 平成23年特別展「文化財を救え！～東日本大震災と文化財レスキュー展」

### 2-1 開催の趣旨と構成

災害救援の一大拠点となっていた遠野市には多くの支援者が集まり、毎日沿岸に出かけていく様子を見ていて、瓦礫処理とともに貴重な資料が失われていくのではないかという危機感を募らせていた。被災状況の全貌も十分に把握されていない時期でもある。文化財が災害時に救済対象になることを早急に知ってもらう必要があった。

遠野市立博物館でも2011年4月から文化財レスキューに取り組んでいた。当時は瓦礫処理や生活復旧が優先される中で、被災地現場で文化財レスキューに携わる人々に対して批判的な目を向ける人々もいたことを感じていた。

このため、どんな思いで文化財レスキューに取り組んでいるのかを伝える必要もあった。「文化財」と同時に「文化財を守ろうとする人々」を遠野は守らなくてはならないと考えて開催したのが、7月25日から9月29日までのテーマ展「文化財を救え！～東日本大震災と文化財レスキュー」である。

### 2-2 展示構成と展示資料

展示構成は、以下のとおりである。

- ・文化財レスキューとは？
- ・岩手県内の図書館博物館の被害とレスキュー状況
- ・遠野に最初に避難してきた文化財
- ・大槌町、釜石市、陸前高田市での文化財レスキュー
- ・小中学校の文化財レスキュー体験
- ・山奈宗真と明治三陸地震津波

実物資料は、館蔵資料、大槌町立図書館と陸前高田市からレスキューした資料など合計24件であった。その他にレスキューの様子を伝える写真パネルを用意した。

陸前高田市の展示資料は、陸前高田市のレスキューに携わる職員に頼んで、特に思い出や思い出のある資料を選んでもらった。そしてコーナーの冒頭には、被災後の陸前高田市立博物館内で見た「博物館資料を持ち去らないでください」の書置きの写真とともに「ふるさとの宝は失われていない」というメッセージをパネルにしかけた。被災実物資料は、昭和の風俗資料として収集されていた少年マンガ誌、片殻が流失した世界最大級のオオジャコガイ、注記のある土器片といった洗浄と乾燥が済んだものと、洗浄の難しいオオムラサキ標本と土人形はポリチャック袋に入れ、被災した状態で展示した。

新収蔵資料としては、釜石市と山田町の瓦礫の中から収集した3月11日で止まった時計である。釜石市街地の瓦礫の中からレスキューした郷土芸能の「虎舞」の頭（写真3）は、「持ち主を探しています」というキャプションを掲げたところ、口コミで広がり、また郷土芸能関係者がブログで紹介した



ところ、釜石市只越虎舞保存会の方が確認に来て、「次郎」という名前の頭であることが判明した。

大槌町立図書館資料はスクウェルチ・パッキング法による乾燥法を紹介するため、一次乾燥した資料を、座布団圧縮袋に入れた乾燥中の状態を再現して展示した。



### 2-3 報道との相乗効果と移動展示

写真3 「文化財を救え！～東日本大震災と文化財レスキュー展」で展示した虎舞の頭

会期の初めに「岩手日報」学芸部が、岩手県全体のミュージアム被災状況を丁寧にまとめた文化財レスキュー特集記事を大きく組み、本展も紹介された。この紙面も新聞社の了解を得て展示に追加した。これにより岩手県内の図書館・博物館・文化財の被災状況が一般に広く知れ渡ることになり、会期中は8,878人が来場した。また遠野市民、災害ボランティア、遠野市内に居住する避難者は入館無料とし、文化財レスキューへの意識啓発を図った。

東京都・代官山の「ヒルサイド・フォーラム」を会場として提供するので移動展をしてほしいとの依頼があり、文化庁ミュージアム活性化支援事業として「文化財を救おう！ 東日本大震災と文化財レスキュー展」（主催：震災からよみがえった東北の文化財展実行委員会、産経新聞社）を10月1日～10月10日まで開催した。

展示資料は、遠野市立博物館会場と同じものに、産経新聞社、慶應義塾大学大学院アートマネジメント分野が撮影したレスキュー活動や被災地の報道写真、文化庁の取組みを紹介するパネルを加えて構成した。会期中の来館者は約600人である。東京のアート・ギャラリーでの展示は初めての経験で、博物館でない場所での移動展示活動の可能性と難しさに気づいた。

## 3. 平成23年度巡回展「震災からよみがえった東北の文化財展」

### 3-1 開催の趣旨

同展は、実行委員会（遠野市立博物館、遠野文化研究センター、日本ミュージアムマネジメント学会、岩手県沿岸自治体、東京都）の主催で、文化庁の「ミュージアム活性化支援事業」を活用した事業として開催された。東京都と岩手県遠野市の2会場を巡回し、文化財レスキューによって救出された資料を公開し、さらなる支援を広く呼びかけることを目的とした。最初の会場は東京都立中央図書館で、会期は平成24年（2012）2月26日～3月11日までであった。遠野市立博物館としては、図書館と協働する展示活動も初めての経験で、図書館の一般利用者のため、展示映像の音が展示室外に響かないようにするなど博物館の展示活動とは異なる配慮が必要であった。

### 3-2 展示の構成

岩手県を中心に、宮城県、福島県の文化財・標本にまつわる救出や修復のエピソードを実物資料（モノ）と写真、映像をあわせて紹介するエピソード展示である。これまでの展示は、遠野市周辺で

の被災を伝えるだけに留まっていたので、この展覧会を構成するにあたり、初めて東北地方の文化財レスキューを俯瞰して見る必要が出てきた。紹介したエピソードは 40 話あり、すべて筆者自身が直接体験したことや取材で採集したものである。



写真 4 気仙沼市「尾形家」レスキューコーナー

エピソード解説は下記の 5 段で構成した。

- ①大見出し ―エピソード採集地―
- ②小見出し
- ③エピソード内容
- ④写真キャプション
- ⑤資料キャプション

例えば、宮城県のレスキューの事例として気仙沼市でのレスキューを紹介したものは、以下の内容である（写真 4）。

①大見出し	流された古民家、博物館で復活―宮城県気仙沼市―
②小見出し	津波で流されてしまった調査中の古民家。残っている部材をもとに国立歴史民俗博物館の中に復元することを計画中。
③エピソード内容	約 200 年の歴史を持つ旧網元「尾形家」。多くの民具、古文書を有するこの地域の中心的家は、津波によって甚大な被害を受けた。国立歴史民俗博物館では、以前から「尾形家」の再現展示をするために調査を行ってきた。震災直後から国立歴史民俗博物館、気仙沼市教育委員会、リアス・アーク美術館、関係機関、ボランティアで家の部材や民具を救出。今は失われてしまった尾形家の復元展示に挑む。
④写真キャプション	・被災前の尾形家、被災後の尾形家 ・尾形家資料の洗浄作業
⑤資料キャプション	尾形家のイワシ網のアバ、尾形家屋根の一部、尾形家のお守り札

筆者が気仙沼市のレスキューを取り上げた理由は二つある。

一つは、筆者が陸前高田市立博物館で資料回収作業をしていた時に、以前から交流があったリアス・アーク美術館と国立歴史民俗博物館職員が様子を見に来た。その際に「尾形家のレスキューをやっているのだ」と教えてくれたことが鮮明な記憶となって残っていたためである。

二つ目は、多様な文化財レスキューの関わり方のモデルケースであったためである。気仙沼市リアス・アーク美術館と国立歴史民俗博物館民俗研究部では、以前から宮城県気仙沼市小々汐の旧家「尾形家」の民俗調査を行っていた。津波によって家屋の壁が流失し、奇跡的に茅葺き屋根部分が残存した。尾形家の家屋や資料は、指定文化財にはなっていないが、研究によって資料の所在と価値を知るリアス・アーク美術館と国立歴史民俗博物館職員によって資料レスキューが行われた。このレスキューは、従前からの研究活動と展示活動の一環として行われた貴重な事例である。

筆者は、「尾形家」が現地で当面復活できなくても、国立歴史民俗博物館の復元展示と研究活動によって「日本人の記憶」の一つとなって残るといふ、復興のモデルとなる可能性を見出していた。

2013 年 3 月、国立歴史民俗博物館総合展示第 4 展示室「民俗」のリニューアルにあわせ、展示室内に「尾形家」が復元展示された。この復元展示には津波で流失した部材の一部も使用されている。

同時に特集展示「東日本大震災と気仙沼の生活文化」が3月19日から9月23日まで開催され、資料レスキューによって明らかになった研究成果の一端が展示と図録によって広く公開された。

### 3-3 展示をめぐる諸問題

#### (1) 福島県の現状をどう展示するか

東日本大震災は、福島第一原子力発電所事故を抜きにして語れない災害である。本展を開催するにあたり、東京都広報担当から福島県の資料を展示する際には安全性を示す必要があるのではないかと。また資料に対する風評被害が起きた場合にどのように対処するのかという問題が提示された。レスキューした資料に放射線量の測定値を付けて展示することは、資料所蔵者やレスキューに携わる人々の心情を考慮すればできることではない。また文化財本来のもつ価値とは異なる文脈を持たせてしまう。

筆者が本展で最も苦慮した問題は、何を展示すれば福島県の文化財レスキューの現状を伝えることができるのかということであった。

展示のヒントを得るため、筆者は2011年当時、資料救出作業にあたっていた「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」や福島県立博物館職員を訪ねて話を聞いた。担当者の話によると、福島第一原子力発電所周辺の資料の多くは置き去りにされているが、被災自治体の文化財担当者の地道な測定の結果、資料を収蔵していた屋内の放射線量は比較的高くないことがわかった。またすでに担当者の地道な努力でレスキューされた資料もあったが、多くの市民が、自分たちの貴重な財産を置いて避難している心情にも配慮しなければならず、どのような文脈で展示したらよいのか悩んでいるという話も聞いた。

福島県の担当者から聞いた話をもとに遠野市立博物館内で議論し、「文化財レスキューのスタートラインにも立っていない」のが福島県の現状なのだという結論にたどりついた。最初の構想では空の展示ケースの中に「福島の文化財」というキャプションを置き、さらに解説パネルでいまだ救出されていない状況を伝えようとした。しかし空ケースはあまりにも寒々しく、空虚すぎるという意見が当館職員から出た。その時期に、ふくしま歴史資料保存ネットワークのメンバーが岩手県沿岸に視察に来る機会があったので、いま伝えたいメッセージがあったら寄せてほしい、言葉が無力だと考えるならメッセージはいらないと依頼した。その結果、「放射線下の文化財を見捨てないでください」というマジックで手書きしたメッセージが来て、これをケース内に展示することにした(写真5)。

この展示以後に、福島県立博物館や福島県浜通りの博物館、研究会が構成する「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」が2014年度から始まり、震災で生じた



写真5 福島からのメッセージ展示

資料を「震災遺産」と位置付けて研究・収集を行い、展覧会を福島県内で継続的に行っている。

2016年12月には宮城県せんだいメディアテークを会場に展覧会「震災と暮らし」を開催するなど、着実に活動を積み上げている。

その一方で、福島県以外の主体が、福島県の資料を福島県以外の場所で展示する活動は決して多くない。

## (2) 津波映像展示の問題

東日本大震災では、津波映像が多くの人々に撮影されている。文化財レスキューや震災後の博物館活動を紹介するにあたって、どのような映像を展示すればよいのかという問題があった。岩手県立水産科学館（岩手県宮古市）は、被災しながら休まず開館し続けた博物館で、2011年震災後の企画展の中で津波映像をすでに公開していた。この映像は、宮古市田老で被災した個人によって制作され、津波の恐ろしさを後世に伝えてほしいという意図で同館に寄贈されたものである。この映像を、岩手県立水産科学館の活動紹介とともに博物館で公開・活用されている「博物館資料」であるというストーリーで展示した。

観覧者への心理的影響を検討するため、公開前に職員内部で見たところ、人が泣き叫ぶ声や鳴り止まないクラクションなどの「音」が心理的に大きく影響するようだった。



写真6 津波の映像展示

「音」の影響を配慮し、映像の音を消して上映することにした。また極力画面の小さいモニターで放映し、視聴前に心理的影響への注意を喚起する表示を行い、監視員を近くに配置して口頭でも促すようにした（写真6）。

津波の映像を上映する一方で、同じ展示室内に津波後に海の生物達がよみがえる様子を記録した映像や被災した郷土芸能の1年間の活動を伝えるドキュメンタリー映像も併せて展示し、津波の映像の衝撃だけで終わらないような配慮をした。

## (3) 被災実物資料を展示することの問題

被災資料の安定化に着手し始めた陸前高田市立博物館から資料を借用する際に、修復された実物資料を展示すると、文化財レスキューがすでに完了したような誤解を与えてしまうのではないかという意見の提起があった。

これを憂慮し陸前高田市立博物館の被災資料については、2011年7月に遠野市立博物館で公開された資料以外は、新たな資料をほとんど追加借用しなかった。

新たな追加資料は唯一、防水資料タグのついた「カデキリ」という民具である（写真7）。カデキリは米が貴重だった時代に米と一緒に炊き込む大根などの野菜を刻む道具で、飢饉の頻繁な地域では一般的なものである。三陸は、「やませ」と呼ばれる春から夏にかけて吹く冷たく湿った東風の影響で冷害による飢饉が起きやすく、東北地方、特に三陸地方の暮らしに欠かせない民具で、陸前高



田市の風土をよく示す資料である。陸前高田市立博物館の資料の多くには資料タグがつき、資料名・年代・採集地などの情報が記されて防水のためラミネート加工され、タコ糸にしっかりと結び付けられていた。この資料タグは、瓦礫の中からの資料を見分ける重要な手がかりとなり、タグ情報をもとに資料目録を復元できる。1人の博物館職員の日常の仕事が資料を救い、博物館再生への手がかりを残してくれたことを紹介しながら、レスキューは端緒についたばかりなのだということを強調した。

#### （4）遠野と沿岸被災地との関係性をどう伝えるか

発災当初からしばしば「津波で被災していない遠野市がどうして文化財レスキューや展示活動をしているのか」と尋ねられることがあった。遠野市で暮らす人間にとっては、沿岸被災地を支援することは当然であるという、ごく自然な感覚があって、筆者自身も理論づけて行動してきた訳ではなかったので、東京で展示する際に、遠野と三陸被災地との地理的・歴史的関係性を説明する必要があった。

その象徴的な資料として紹介したのが、『遠野物語』第99話の朗読にアニメ風の絵をつけて紹介する映像コーナーである（写真8）。第99話のストーリーはこんな話である。遠野の北川家という学者の家から三陸の田の浜へ婿に行った「福二」という男が、明治29年の三陸地震津波で妻子を失い、生き残った子どもと共に仮小屋を掛けて暮らしていた。ある霧深い夏の夜に、ふと目覚めて津波で死んだ妻が男と歩いているのを目撃する。この男も津波で死んだ者で、妻が結婚前に好き合っていたという噂があった。福二は、妻に声をかけると「今はこの人と夫婦になった」と答える。「子どもは可愛くはないのか」と問うと妻は顔色を変えて泣き、やがて2人は足早に立ち去って消えてしまう。福二は追いかけるが、すでに死人であると気づき、夜明けまで道に立ちすくんでいた。その後長いこと病を患ったという。震災前は、この話を風変りな幽霊譚くらいにしか捉えていなかったが、震災後は1人の被災者の心の葛藤の物語ではないのかと思ひ直すようになった。今でいえば、海の暮らしを知らない遠野育ちのインテリ男性が、津波で妻子を失い、慣れない子育てをしながら仮設住宅で暮らしているという状況である。被災から1年経っても、彼は心の整理がつけられずにいたのではなかったか。病気を長く患ったというのはPTSD（心的外傷後ストレス障害）のようなものではなかったのだろうか。『遠野物語』に記された明治三陸地震津波の記述は、被災した人の心の内面を記憶するという繊細な記憶の仕方があるということを示している。さらに山奈宗真の津波被害記録の展示と併せて、遠野には三陸に津波被害があった時に扶助し、扶助を通して災害の記憶を残し伝える歴史的役割が潜在していることを紹介した。

半ば想像に近い考えが確信に変わったのは、震災から約1年経とうとする2012年2月末の出来事である。当博物館を、福二の子孫という方が訪ねてきた。その男性が言うには、「今回の津波で田の浜にあった家は流されて、母親も行方不明になり、家系図も家の記録も無くなってしまったので、もう一度作り直したいと思っている。かつて母親が『遠野物語』を読み、そこに先祖の話が書いて



写真7 カデキリの展示



写真8 『遠野物語』映像コーナー

の一周忌をするべきか心の整理がつかない時に、夢に台所に立つ母親が現れて会話し、それで吹っ切ることができたと言っていた。『遠野物語』の世界が、100年の歳月を経ても地続きであることに深い衝撃を受けた。遠野と三陸の関係性を表現し、災害の記憶の仕方の一つのモデルとして、このテーマを選んだのは間違いではなかったようである。

### 3-4 展示の効果

#### (1) 文化財レスキュー関係者への効果

本展示では、文化財レスキューの動機の多様性やレスキューに携わった多様な人々の姿を紹介し、それぞれの活動ができるだけ多くの人々の理解を得ることができるよう支援する意味があった。

会場館の東京都立中央図書館は、図書館・博物館の垣根を越えて本展の運営を協働する過程で支援への理解を深めていた。元来、都立中央図書館は図書修復専門の部署を持ち、長年高い技術を培ってきた。本展でも同図書館の資料保全技術を紹介するコーナーを設けた（写真9）。

同図書館は、本展会期終了後も独自に陸前高田市立図書館の郷土資料の抜本修復を行い、その成果を展示や記録映像にして公開するなど支援活動を継続している。

同展は2012年3月11日～3月28日まで遠野市立博物館に巡回した。会期中には文化財レスキューに携わる被災地職員を招き「文化財レスキューフォーラム」を開催して現状と課題について共有し、発災時の情報共有と初動体制の問題や被災資料の一時保管場所の確保、職員の雇用問題などが議論され

た。翌日には沿岸被災地の図書館博物館のエクスカッションを行い、これを契機に被災地以外の地域の参加者も被災地との関わり方を考える新たな糸口となったと思われる。

#### (2) 東京・遠野会場の観覧者アンケートから

東京都立中央図書館には、秋篠宮殿下、妃殿下、眞子内親王殿下をはじめ4,529人、遠野市立博物館には844人の来場者があった。観覧者アンケートをとったところ、東京会場では493



写真9 東京都立中央図書館の紹介コーナー

人、遠野会場では31人の回答を得た。

東京会場では来場者の65%が都内在住で、60%が男性、年齢階層では60代が20%であるが30代～50代も16%～19%あり、職業別には「会社員公務員自営業」が46%で最も高く、比べて大学生や学校教員はどちらも6～7%であった。なぜ来場したかの理由は、複数回答で「文化財に関心がある」47%、「タイトルに興味を持った」46%、「被災地に親戚や知人がいる」15%、「震災から1周年だから」22%であった。特に印象に残った展示ベスト3は、陸前田市立博物館に残された「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です」という「瓦礫の中のメッセージ」56%、文化財レスキュー概要43%、大船渡市吉浜に昭和8年（1933）三陸津波で打ち上げられた津波石が、その後の工事で地中に埋められ長らく所在が不明になっていたが、東日本大震災で出現したことを紹介した「再び現れた津波石」の拓本と写真41%であった。東京会場は、文化財そのものや東北に関心や縁故のある中高年の勤労者層が、震災1周年の追悼もかねて訪れているケースが見受けられた。また、東京出身の高齢者の中には、自分の東京大空襲の記憶と被災した釜石市の官房射撃砲弾などの戦災資料を重ね合わせて見る方もいた。

遠野会場の場合は男性54%とやや男性が多いものの男女差は大きくない。年齢別では19歳以下が35%で、次いで20代～30代が多い。遠野市を含めた岩手県内が40%、県外が47%である。職業別には会社員公務員が25%、大学生以下は47%となっており、来場の理由（複数回答）は「文化財に関心がある」48%、「タイトルに興味を持った」29%、「震災ボランティア経験者だから」25%であった。遠野会場の場合は、沿岸被災地でのボランティアを経験した青年層が強い関心を抱いていることがわかる。特に印象に残った展示についての設問では、『遠野物語』99話を紹介した「津波を語り継ぐ」映像45%、文化財レスキュー概要41%、「再び現れた津波石」の拓本35%であった。『遠野物語』99話の映像に関心を持たれたのは、来場した人が遠野や『遠野物語』に関心があったためであろう。

### （3）静岡・愛知・兵庫会場の観覧者アンケートから

平成24年度は、巡回展「震災からよみがえった東北の文化財展」を静岡県庁展望ロビー（2012年10月26日～11月12日）や愛知県大府市横根公民館（11月15日～12月5日）、阪神淡路大震災記念人と防災未来センター（12月11日～2013年1月27日）で公開し、被災地へのさらなる支援を呼びかけた。

静岡県は遠野市に拠点を置いて長期間に渡り震災支援活動にあたった自治体で、その関係で静岡県庁展望ロビーを会場に開催し、2,706人の来場者のうち394人からアンケートの回答を得た。これによると静岡県内の男性が60%で、この展覧会があることは知らず展望ロビーに来たついでに観覧した人が37%で、文化財レスキューという活動を初めて知った人がほとんどであった。印象に残った展示の上位は「再び現れた津波石」40%、文化財レスキュー概要37%、「瓦礫の中のメッセージ」33%であった。静岡会場で特筆すべき点は、アンケート自由記述やギャラリートークの応答から得られた「静岡にはかねてから東海地震、南海トラフ地震が来ると言われているのだから他人事ではない」という未来志向の防災的な受け止め方であった。

愛知県大府市は、遠野市と防災協定を結ぶ友好都市である。ここでは1,055人の来場者のうち370



人からアンケートの回答を得た。ほとんどが大府市内を含む愛知県の方で来場者の男女比はここでは半々となり、高齢者層が多い。公民館という高齢者や女性にも来場しやすい場所柄であったためであろう。印象に残った展示は「再び現れた津波石」52%、陸前高田市の高田松原が文化財であり、唯一残った一本松が被災地の人々を勇気づけてくれていることを紹介した「ありがとう一本松」49%、「瓦礫の中のメッセージ」46%であった。自由記述や平均観覧時間の長かった展示は、三陸沿岸の郷土芸能に関する展示であった。大府市や近隣の東海市には、かつて岩手県釜石市の新日鉄釜石に勤務し、工場移転と共に移住した人々が多く、釜石市の虎舞などの郷土芸能や祭りの復活の映像を懐かしいと涙を流しながら見る観覧者がいた。また伊勢湾台風や東海豪雨などの愛知県における過去の被災経験と結びつけて見る記述もあった。

神戸会場は、31,240人の来場者があったが、人と防災未来センターと併せての利用が多く、アンケートを得たのは47人と少数であった。また回答も展覧会そのものではなく、人と防災未来センターの展示や利用についての感想も含まれていた。特に印象に残った展示については、文化財レスキュー概要34%、「津波で止まった時計」と「ありがとう一本松」が同じ31%、『遠野物語』を紹介した「津波を語り継ぐ」25%であった。ギャラリートークの際には、人と防災未来センターで阪神淡路大震災の体験を語る解説ボランティアも多く訪れていた。解説ボランティアとの対話から得られた声は、阪神淡路大震災の被災体験を風化させず、どう後世に語り継いでいくかに強い関心があることだった。

全体の会場を通して好評を得たのは、遠野市の学芸員が交代で行ったギャラリートークであった。観覧者から「解説を聞いて良く分かった」という感想を得るほど、資料だけでは伝えきれない展示の限界を感じた。また文化財レスキューとの直接の関連が薄い「再び現れた津波石」の展示が予想外に強い関心を持たれた。津波の猛威を解りやすく伝える展示がインパクトを持ったのではないかと考えられる。まだどの会場でもその地域の過去の災害の記憶や知識を持つ人は、自分と結びつけてシンパシーを持って見る傾向があった。このような災害に関する巡回展示は、その地域博物館と連携して、地域の災害展示を併せて紹介すれば相乗効果があると考えられる。

## おわりに

2011年時点で東日本大震災の文化財レスキューをテーマにした展示活動は、遠野市立博物館が最も早かったと言われている。東日本大震災が発災するまで、当館には文化財修復の技術や文化財レスキューに対する知識を持っている職員はいなかった。しかし、これまで培ってきた三陸沿岸との関係性によって、展示という手法を使って被災博物館の代わりに最初の救援信号を上げたに過ぎない。続けて開催された巡回展は、被災地の博物館職員のみならず直接文化財レスキューの支援者を援護する意味もあった。これら一連の展示は、災害時の後方支援活動の一つと位置付けることができる。

遠野市立博物館（遠野文化研究センター）が、2011年から2013年まで開催した展示活動は、2015年に遠野市防災センター敷地内に建設された「後方支援資料館」で紹介され、『遠野市後方支援活動検証記録誌』に記録されている。遠野市が官民一体となって展開した後方支援活動の一つとしての記憶されていくことだろう。

また、東日本大震災後に見直された「遠野市地域防災計画」には「後方支援編」が新たに設けられ、



---

後方支援活動の一つに「文教支援」が位置付けられている。この計画の「文教対策」には「文化施設及び文化財に対する応急対策の実施」が含まれていることから、遠野市は、近隣市町村に大規模災害が発生した際に文化財レスキュー支援を行うことが可能になった。このことは、展示活動によって文化財レスキューを可視化し、広く市民の理解を得られた大きな成果であったと言えよう。

---

#### 註

---

(1)——人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館「平成24年度～平成26年度 大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究 研究会資料集」176頁、2017年

(2)——遠野市『遠野市史 第3巻』624頁、1976年

(3)——遠野市教育文化振興財団『遠野の生んだ先覚者 山奈宗真』, 1986年

(4)——大船渡市立博物館『津波をみた男 100年後へのメッセージ』, 1997年

(遠野文化研究センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年12月18日受付, 2018年8月3日審査終了)